

Title	安南人のおはぐろ
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.12, No.4 (1933. 12) ,p.96(676)- 96(676)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	餘白録
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19331200-0096">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19331200-0096</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 安南人のおはぐろ

安南に來て先づ目を煮くのは、その男女が老若を問はず齒を染めて居ることである。普通日本などでは南洋の此風俗を土人が檳榔樹の實を噛むためと云つてをるが、安南人の此風に對しても初め歐人の旅行者は、矢張りそう解してゐたが漸次觀察が進むにつれ、これが藥品を塗つて特に黒くする結果であり、その目的が齒を丈夫にするためにあることが明かにされた。この問題について

A propos des dents noires des annamites et de la chique de bétel, par Holbe (Bulletins et Mémoires de la Société d'Anthropologie, 1908), Le langage des dents et les teintures dentaires chez les Annamites, par Dr. Sallet (Bulletin des Amis du Vieux Hué, No. 4, 1928)などがある。

サレー氏の説く所に従ふと、染齒の風と檳榔樹の實を噛む風とは全然別個のものであり、後者は初め齒を保護するため、後、美容のため行はれたとなし、その普通の方法は、先づシトロンの汁で齒をよく洗ひ、その前日は飲食を斷ち、次に五陪子、黑礬(硫酸鐵)、石榴皮を粉末にして混ぜ、之に糊粉を入れて少量の水に溶解せしめ、之を少し熱してよくまぜ、バナナの葉の片の上に担ね擴げ、之を齒の上に就寝前附着せしめる。勿論その方法は所によつて違ひ、順化の王城で明命帝の令で特に選ばれた方法といふのによると細い炭の粉末を小さい布袋に入れ、之で齒を磨き、口を洗ひ、次にシトロンの口に含み、齒を柔軟にする。この豫備方法が三日続き、その間被手術者は助手によつて口中に粥を流しこんで養はれる。次に梗見と呼ばれる大戟料植物の漆を塗り、その後、次に次の處方をつくつた固齒膠をあてがふ(青礬、黑礬、五陪、白芷、山檳榔、川穹、白蔘、甘草、當歸、細辛、三奈)。かねつけには之を職業とする婦人あり、之が三センチに十センチ位の大いさのバナナの葉片を切り、その上にこの膠を担ね、仰けに寝て口を開いて居る被手術者の齒にあてがふ。その時刻は、夜の酉の刻で塗られた當人は、終夜不動でゐなければならぬ。朝になるとその葉を外し、口中を上等のニオク・ナム(安南の醬酒)で洗ひ、それから十二日間口を開いて東南の風にさらして置かねばならぬ。それが終ると一種の齒磨粉を指で齒の上にこする。こうして置くと以後齒は黒光りを發し、一切の虫は殺されてしまふと信ぜられてをる。この習慣は男女とも十六歳から適用され、安南人は、かく染められた齒に非常な魅惑を感じ、佛人でも印度支那に長く滞在して居ると安南の婦人が、その齒のよくおはぐろされて居る場合初めて美と感ずるそうである。(松本信廣)